

F-1 CSTBの近況

CSTBマーケティング・国際業務担当理事 ブルーノ・メジュレ

では、理事長、お集まりの皆様、ただ今の、笹井さんからのお話に応えまして、今度は私どもCSTB側から、新しい事項として、どのようなものがあるかご紹介してまいりたいと思います。

既に当方の理事長から、重要なことについてはお話ししましたので、その中のポイントだけをお話ししていくことにいたしましょう。

細かくお話をしていきたいと思ひ資料を準備しましたので、お手元には細かいものが配付されていると思います。それと同時に、年次報告書には重要な数字が入っておりますので、それも後ほどご覧いただければと思っております。

2010年、私どものセンターにおきましても、今後をにらむ形でどのように戦略目標を立てていこうか考えました。それによりまして、今年2010年、私どもCSTBと国との間の契約に調印することとなりました。

F-1資料スライド3

CSTBにも主要事業があり、それがこちらのキーワードとなっております。まず、私どもはこうした建築分野、建物において、イノベーションをしっかりと下支えしていきたいと考えました。

2点目は、先ほどデルキャンブル理事長からお話ししましたように、持続可能な発展は、サステナビリティになります。

スライド5

そして、私どもの守備範囲ということですが、3つ目のキーワードとして、今までの守備範囲は建物だけでしたが、それを街区まで、いや、その「まち」まで手を広げようということになりました。また、CSTBとしては、今後は、さらに自分たちの守備範囲を広げ、国だけではなくヨーロッパ、そして世界においても業務を遂行していこうと考えております。

そして、私どもとしても、学術的、技術的な重点課題をはっきりさせようということで、今やそれが「4+2」ということになります。その「4+2」の「4」のほうですが、まずは、持続可能なまちにあって、その中での街区ということ。2つ目は、いわゆる持続可能な建物。そして、3つ目が、使い勝手のいいもの、健康にもいいもの、快適なもの。そして、4つ目がリスク管理ということになります。「+2」については、5つ目として、建築業界をもっと横断的に変革していこうというものと、最後の6つ目は、先ほどお話があったように、デジタルツールをもっと活用していこうというものです。

スライド7

CSTBの組織については皆様よくご存じでいらっしゃると思いますので、そのことについては言及いたしません。CSTBのグループとして新たな下部組織ができましたので、それをご紹介します。

スライド8

それはCERTISOLISという下部組織で、何をするとところかという、太陽光発電設備の試験、そしてまた、認証まで行う機関です。

スライド10

研究面については、当方のシャリュから詳しくお話しさせていただきますけれども、その中で

も大きな出来事として、私どもは公的資金に基づいた研究もしておりますと同時に、民間組織との協力研究も行っております。特に、2006年以来、カルノ・インスティテュートの認証ラベルを取ったということがあります。

ドイツのフラウン・ホプファーはご存じだと思いますが、あちらで実施していることと同様な研究機関のネットワーク化がなされており、その中の一つの仕様という認証をもらったこととなります。

スライド11

先ほど、私どもの技術的・科学的な重点課題ということでお話ししたばかりですが、こちらでご覧いただいてわかるように、黄色いほうはデジタルツールとシミュレーションを行うというもので、また、建築業界の変革を行いたいというものが右側です。

そして、最初の4つがこちらで、つまり、持続可能なまちを街区から始めてつくっていくということ、それから、健康・機能・快適性。それから、リスク管理。下が持続可能な建物で進めようということなのです。

数字についてはあまりお話ししませんが、CSTBとして、研究予算のトータルくらいはお話ししておきましょう。研究のための助成金という形で、約2,000万ユーロをもらっています。

スライド12

そして、博士号を持っている研究者の数が80人、2009年の時点でCSTBにいます。

スライド13

私どもは、アメリカのNIST (National Institute of Standards and Technology) とのパートナーシップを組んでおります。

スライド14

そしてまた、私どもは、いろいろな知見をCSTBの中において主に開発していくことの一つとして、冒頭に理事長からお話ししましたように、一例としてはバリアフリー住宅があります。同時に、もう一つ、人口の高齢化というお話もさせていただきましたが、そうした高齢者が在宅のままで人生を送ることができるような住宅についても開発プロジェクトを行っております。

スライド15

こちらは、社会的に、高齢者の在宅居住をどのようにしていくか、そうした要望に応えるものでもありますし、同時に、この研究はハイテクを駆使するという意味でも興味深いものがあります。つまり、デジタルシミュレーションなどを用いているいろいろなセンサーを据えつけて、高齢者が家の中でどのような行動をとるのかをしっかりと探知し、それに合った住宅を建築していくという意味で、ハイテク並びに情報処理を駆使した研究になるかと思えます。

スライド16

もう一つ、私どもの知見として行っていることは、例えば、一つの建物の性能、つまり、環境に対してどのくらい良い性能を持っているかということ、幾つかの基準を設けて、それによって算定していくという手法です。例えば、この建物に使われている建材が、環境に対してどのような性能を持っているかということ、これを計算できるというものです。

スライド17

それから、もう一つ、大規模な試験研究施設があります。それはAQUASIMという施設で、実際に新しい施設で、水の物理的・科学的な動向をシミュレーションできる施設です。つまり、建物と、それを取り巻く区画、また、環境など、全体をそれによって試験・研究できる大規模施設

設でありまして、今年の9月にオープンしました。

この施設はナントのまちにできていまして、こちらには環境の風洞実験施設がありますので、そこに近いところにあります。今やナントは、フランスだけではなくてヨーロッパレベルにおいて水と空気についての研究施設が集まっている地域となりまして、一種のテクノパーク化しております。

スライド21

CSTBの3つ目の業務として大きなものが、技術評価という手法です。

スライド22

私どものこうした技術評価に合わせた大きな目標の一つが何かといいますと、こうした新しいいろいろなシステム、また、イノベーションがあった場合に、フランスにおけるアビテクニク、技術認定並びにヨーロッパにおけるヨーロッパ技術アグレマンというものを出していくわけですが、そこに「環境」という要素を取り込んでの評価をしていこうという取組になっています。つまり、製品が環境に対してどのくらいのインパクトがあるのかという評価も含めることとなります。

同時に、私どもの2つ目の目標として、私どものこうした評価システム、一つ一つの建材や技法が、建物をつくるということにおいて、その建物のライフサイクルにおいて、しっかりとその評価が一緒になって推移できるような形のものにしていきたいと考えております。

そしてまた、私どもとしては、欧州のこうした技術評価をする機関としてメジャーでありたいという意欲があります。そうすると、ただ単に建築部材だけではなく、実際に、その建築物の単位における技術評価でも欧州の柱となっていきたいと考えております。

スライド23

このように、そういうことをするとすると、過去に比べて、もっと他組織との交流も発展させていかなければいけません。ヨーロッパの、私どもと同等の組織だけではなく、もっと世界の同じような組織との交流が必要になるわけで、日本の方ともお話をしましたが、その一つとしてWFTAO (World Federation of Technical Assessment Organizations: 世界技術評価機関) がありますので、そうしたところにおいても、いわゆる相互認証ができるような方向を目指していきたいと考えております。

スライド25

そして、先ほどデルキャンブル理事長からも話がありましたが、イノベーティブなものが出てきた場合、そうしたものを迅速に認定していこうという形での手法ができております。特にその中においても、いわゆる太陽光発電施設が大部分を占めていることが、こちらをご覧くださいおわかりいただけます。

スライド27

また、VEAとしての技術評価事業として、私どもの下部組織にCERTIVEAというものがあります。こちらは日本のCASBEEと同じものです。そうしたものがあります。

スライド28

私どもは、数年前から、幾つかのタイプ別認証も実施しています。つまり、こうしたタイプはこうした基準でというものを設けまして、そのタイプの基準に合うものであればそれで認証が取れるというものです。

スライド29

先ほどデルキャンブル理事長からも話がありましたように、フランスでグリーンビルディング協会を創設しました。

スライド31

また、海外との協力ということで、中国においてもCSTBは、特に今年2010年の上海万博の際に仕事をしております。

スライド32

また、SBアライアンス（持続可能な建築連盟）においても、建物の、いわゆる性能指標の調和のための仕事をしています。

スライド33

そして、最後に、日本の機関とどのような交流をしているかということで、ここ数年間のものを取り上げてみますと、例えば日本グリーンビルディング協会とのお付き合いもありますし、都市形態学、つまり、まちの形という意味での比較もしておりますので、そのようなことで世界中のいろいろな国々のまちの形の比較、特に日本では、京都の立命館大学並びに東京大学との交流もあります。

また、慶應大学の村上先生とは、性能指標ベンチマーク、また、測定法ということで、例えばGHG排出量の測定法などという意味での交流もありまして、それは建物単位、まち単位の形での測定手法です。

スライド34

最後に、私どもは4年前の会議の際に京都を訪問することができましたので、そのときの思い出とともに私のプレゼンを終わらせていただきます。

ありがとうございました。